



- 1 創立100周年寄稿
- 2 調布市との共同事業、第2回卒業生顕彰式
- 3 第1回イングリッシュ・プレゼンテーション
- 3 創立100周年記念事業募金寄付者銘板除幕式
- 3 創立100周年記念事業募金寄付者芳名
- 4 100周年編纂余話、明高ひとくちメモ

— 「創立100周年記念事業NEWS」最終号によせて —

校長 金子光男

今年、10月26日(土)は、私にとって誠に感慨深い日となりました。当日、「100周年記念事業」にご支援頂いた皆様方のお名前を刻した銘板が、本校に掲げられたからです。総数722件、募金総額は目標をはるかにこえる金額となりました。募金期間とその間の経済事情を考えれば、これはもう快挙という他はありません。

折しも、今年の文化祭のメインテーマは「明治鉄道101」でした。生徒たちがここにこめた願いは、こうです。付属校が一致団結し、向こう100年にむけて輝かしい第1年目をスタートさせよう。「銀河鉄道999」は宇宙空間を旅する列車でしたが、付属鉄道「101」は100年という時間を飛翔する列車です。この銘板に刻まれた方々は、この列車と共に、100年後の付属に関わる全ての人々に届けられるでしょう。その時、人々は思うに違いありません。100年前の皆様方のこうした熱意と献身があったればこそ、わが付属は、今こうしてアルのだ、と。それは丁度、われわれが現在、100年前の創立者たちの理想とその実現に尽くされた努力に感謝しているのと同じ思いに通ずるはずです。

100周年記念事業は、この度の銘板除幕をもってその事業のほとんどを完了しました。あと残す事業は100周年記念史の刊行と各種の教育振興プログラムの継続のみです。特に、後者については、「新たな世紀の飛翔を期して、一過性の行事、イベント」にならないように企画された諸事業であることを、ここに付しておきます。

記念事業のハイライトは何と云っても、昨年11月17日に挙行された式典・祝賀会です。主催者の一人としてこう言うのは、いささか面映ゆいところですが、敢えて申し上げます。規模と厳肅さ、華やかさに感動。そのいずれもが群をぬいた祭典であったと存じます。それは今なお寄せられる多くのお言葉からも間違いのないところでしょう。

しかし、われらが祭典はあの式典の一日だけの事で

あったわけではありません。付属生徒及び卒業生の一人ひとりが母校の100周年を喜び、その意味を心深く受けとめて、この祝い事を何とか自分たちの形にしようと様々に企画し、それを実現してくれました。先生方はそうした彼らの意を汲みとり、共に努力したのであります。

ところで、慶事を祝すとはどういうことでしょうか。私は思います。まずは本校の今にいたる「伝統と偉業を顕彰」し、その礎を築かれた創設者たちに感謝する。そうして、明日への展望をひらくことである。祝いとは、そのようなものでありたい、と。かくてこそ、先にもふれましたが、祝事は「一過性の行事」たるを免れるのではないのでしょうか。それを実現するために、全ての企画において、私は付属の現在の力量を少しこえたところに目標をすえました。そのことで、これに関わる者たちは皆夫々に企画力を養い、その実現までの創意と工夫、靱い心を身につけたのではないかと信じます。これらが次代に受け継がれ、伝統となるとき、付属の明日は揺るぎないものになりましょう。これを私の祈りとしめます。

この度の100周年の記念事業については、実に多くの方々のご尽力を頂きました。まずは、本事業委員会の皆様方に感謝いたします。校長に就任して半年後の何も分からぬまま、忽々に設置した委員会でした。にも拘らず骨太な方針が出され、細目は付属教職員が担いました。付属PTA、OB会には最大のご支援を賜る一方、付属に関わる各事業者、法人、団体に加えて、理事会、学部長会、評議員会からも多大なるご助力を頂戴しました。付属がこのように扱われたことはかつてなかっただけに、私は一驚し、「明治は一つ」になったと喜びました。末筆ながら、裏方に徹し本事業の遂行に最善を尽くした事務方の努力にも、心より謝意を表します。これをもって「事業NEWS」最終号のわが言葉といたします。

調布市との協同事業を実施

調布市に移転して今年で6年目を迎えた本校は、地域に根ざした学校づくりを目指し、創立100周年記念事業の教育・文化・スポーツ事業の一環として、以下の協同事業を実施しました。

小学生向け理科教室を開催

調布市「科学センター講座」の第5回目の講座が8月24日、本校で開催されました。

当日は、市内の小学生30人が参加。「おもしろ化学実験・ケミルミネッセンス」をテーマに、本校の櫻井清孝教諭の指導の下、化学部の尾野雄大君（高Ⅱ）と三枝尚樹君（高Ⅱ）を中心とした本校生徒12名がアシスタントを務め、日ごろ何気なく使っているケミカルライトを作る体験などを通じて、駒込ピペットやメスシリンダーの使用方法を学びました。

調布市では調布市科学センターを設置し、市内公立小学校5・6年生児童に理科をもっと好きになってもらうことを目的としてさまざまな科学に関する講座を開

設しています。この度、その一環として、本年度実施する同市科学センター講座全14回のうち第5回講座を本校が担当しました。30人の定員に対し、150人の応募があり、この日は抽選で選ばれた30人が参加しました。講座に参加した小学生たちは、年齢の近い“先生”からの教えに科学への興味をさらに強くした面持ちで、楽しそうに実験に挑戦していました。



第68回国民体育大会に本校生徒が協力

本校生徒は、9月28日から10月14日まで、54年ぶりに東京で開催された第68回国民体育大会に協力しました。同大会のメイン会場が、調布市にある味の素スタジアムということもあり、スクールバスでの国体

開催広告掲載、各都道府県代表選手歓迎のための“のぼり旗”作成、メインスタジアム装飾用の花の育成、中学生によるサッカー競技観戦（10月3日）など、様々な形で参加しました。

第2回卒業生顕彰式を挙行

本校は、7月27日、駿河台キャンパス紫紺館で卒業生顕彰式を挙行了。学部長奨励賞を受賞した現役明大生や、司法試験・公認会計士試験の合格者など卒業生13人を表彰しました。

この顕彰式は、本校を卒業後、学術・文化・スポーツなどの分野で活躍し、優秀な成果を取めた卒業生を称え、今後一層の活躍を奨励するとともに、在校生の模範となるよう顕彰するものです。昨年の創立100周年を契機として始まり、今年は2回目の開催となりました。

式典には日高憲三理事長、福宮賢一学長ら明治大学役職者や、金子光男校長ら関係者が参列し、卒業生の功績を祝しました。

あいさつに立った日高理事長は「明治高校が素晴らしい人材を輩出していることを多くの方に知ってもらうと同時に、顕彰式は後



輩たちを鼓舞しようと始まったもの」と開催経緯について説明し、「常に挑戦し、社会貢献の気持ちを持つことが、人生を大きくたく価値のあるものにする。皆さんは若くして素晴らしいスタートを切っている。今後母校明治の発展に力を貸してほしい」と期待を込めて述べられました。

金子校長は、卒業生に表彰状を手渡した後、「皆さんの精進、活躍が今回の顕彰に繋がった」と祝辞を述べ、「皆さんの活躍は在校生の励みになっている。模範となっていることを自覚し、今後より一層の活躍を期待している」と激励しました。

受賞者を代表してあいさつに立ったのは、大学在学中に明治大学マークをデザインした岸塚大季さん（1996年本校卒）。岸塚さんは「高校時代はマンドリン部に所属し、1年360日くらいの厳しい練習の中で高校生活を過ごした」と明高時代を振り返り、「明治の将来を願ってマークを作成した。今後も明治高校、明治大学への思いを強く持って頑張っていきたい」と力強く語りました。



明治大学マーク

第1回イングリッシュ・プレゼンテーションを開催

本校では6月11日、創立100周年教育振興プログラムの一環として第1回イングリッシュ・プレゼンテーションを開催しました。約30人の応募者の中から選ばれた高校Ⅱ・Ⅲ年生の7人が、「世界の中の日本」(高Ⅱ)、「賛否両論ある議題」(高Ⅲ)というテーマのもと、パワーポイントを使用し、約5分間、英語でプレゼンテーションを行いました。

優勝に輝いたのは、「Animal Testing for Cosmetics in Japan (日本における化粧品の動物実験について)」をテーマにした米山沙織さん(高Ⅲ)。EUと日本の化粧品に関する動物実験の規制状況などを比較し、日本

でのルール整備を呼び掛けました。

このプログラムの入賞者には鶴澤総明教育振興プログラム奨学金より短期留学費の一部が支給されます。



創立100周年記念事業募金寄付者銘板除幕式を挙行

本校は10月26日、創立100周年記念事業募金の寄付者芳名を刻銘した銘板の除幕式を執り行いました。この銘板には個人1口3万円以上、法人・団体1口10万円以上の寄付をいただいた方、スクールバスのラッピングにご協力頂いた企業の芳名が刻印されています。

あいさつに立った金子光男校長は募金者や関係者への謝辞を述べ、続いて明治大学の飯田和人教務担当常勤理事、総明会長の尾島育四郎氏、PTA会長の岩川晋太郎氏が、それぞれ祝辞を述べました。

除幕には金子校長、飯田教務担当常勤理事、尾島会長、岩川会長に加え、明治大学の伊藤光副学長(総合

政策担当)、白駿会長の依元正美氏、東京ガス顧問の前田忠昭氏が参加。全員で一斉に幕を引き、銘板が現れると、明高中の将来を記念して大きな拍手が起きました。



創立100周年記念事業募金寄付者芳名

2013.2.1～2013.3.31受付分 31件 1223万1000円

2013年3月末日をもって受付を終了いたしました。御支援いただいた皆様に感謝申し上げます。

【最終集計報告】

受付期間 2010.11.1～2013.3.31

累計 722(680)件 1億1926万1202円

698万1000円

明治大学附属明治高等学校・明治中学校PTA 殿

100万円

東日本電信電話(株)代表取締役社長 山村 雅之 殿
結城 康郎 殿

70万円

明高中PTA2012年度文化祭実行委員会 殿

50万円

明治大学附属明治高等学校2012年度卒業生保護者一同 殿

30万円

宮下 守正 殿
明治大学附属明治中学校2012年度卒業生保護者一同 殿

20万円

安部 友己 殿
田中 等 殿
西原 正隆 殿

10万円

狩野 智雄 殿
福光 登志雄 殿

7万円

磯兼 由梨奈 殿

5万円

鋒崎 正樹 殿
矢羽 利雄 殿
渡辺 俊明 殿
匿名 1名

3万円

伊藤 大地 殿
鈴木 裕文 殿
関 千俊 殿
反町 正明 殿
田中 あかり 殿
津久井 拓真 殿
細川 祐二 殿
水谷 正男 殿
向井 規雄 殿
匿名 3名

1万円

匿名 2名

*明治高校同窓会総明会殿からは、受付期間以前(2008.10.21)に別途284万5000円の寄付(明治大学附属明治高等学校・中学校教育振興・環境整備基金として受付)があり、同会からの創立100周年記念事業目的とした寄付金総額は3000万円となります。

100周年編纂余話

記念式典後の作業

昨年11月17日に行われた100周年記念式典開催に合わせて『明治大学付属明治高等学校・明治中学校講師関係資料目録』を発行した。本校は3度も火災に遭遇したためか、戦前の資料は少ないようだ。戦後から現在に至るまで保存されている書類（資料）は思ったより多く、資料目録の続編を作成しようと作業を進めている。

これと並行して、明治中学校・高等学校の100年間に興味や関心を深めていただけるように、これまで収集した資料を公開するように作業をすすめている。その手始めとして年表をつくることにした。資料の少ない中で年表づくりは厄介なものだが、幸いなことに戦前の明治中学校は会誌（『校友会誌』・『報国団誌』）を発行していたのである。会誌の中に日付順に学校のできごとを短文で記した「校報」・「校乗摘要」というタイトルがついた記事が掲載されていたので、これをもとに年表の作成作業にとりかかった。ただ、「校報」・「校乗摘要」の記事は、1916（大正5）年12月から1942

（昭和17）年12月までの分しかないので、既刊の資料目録から年月がわかるできごとを年表に入れるようにした。来年3月には100周年年表のうち戦前の分が刊行される。

さらに、明治中学校卒業生の聞き取りも実施した。昨年の総明会（同窓会）で1940年に卒業したOBの方が出席していたことを田中徹太郎教諭から連絡をうけた。田中教諭に連絡の労をとってもらい、6月16日、OBの方の自宅に赴き聞き取り調査を実施した。この成果は、100年史に反映させていきたい。

月	日	内 容
1911(明治44)年		
9		岸本辰雄、明治中学校設立認可願提出。
11		明大校内雑誌に附属中学校、明年4月授業開始通知を掲載。
1912(明治45)年		
1	24	明治中学校設置認可
2	16	校長(鶴澤総明)認可。
3	5	明治大学記念館ガズ騒音より出火し中学校校舎類焼
4	4	明治大学厚本校長逝去
4	8	開校。初代校長鶴澤総明(明治大学教授)
4	8	教育勅語謄本下付。
1915(大正4)年		
11		校旗授与式
1916(大正5)年		
4	6	入学式(講堂、鶴澤校長訓話、8:30~)
4	7	始業式(講堂、鶴澤校長・村田教頭訓示、8:30~)
4	8	授業開始。年間待学生4名
4	29	奉季遠足(神奈川県逗子・金沢・横浜方面、1・2年生横浜で下車し三溪園、職員生徒総数約600名)
5	2	体格検査(〜6日)
5	29	1・2年生徒約300名、欧州大戦乱写真観覧(文部省修文館、各主任教師引率)
5	31	3・4・5学年生徒約300名、欧州大戦乱写真観覧(文部省修文館)
6	15	箱道部の試験(13:30~)
6	30	1学期の図書部・箱道部活動終了
7	1	40分授業、午前7時10分始業。村田教頭、中等教育研究会会議出席(高等師範学校、〜2日)
7	15	第1学期試験(〜19日)

『100周年年表』の冒頭部分

鶴澤総明初代校長の墓碑参拝

10月12日、金子光男校長をはじめとする本校関係者11名が、青山霊園（東京都港区）に眠る初代校長、鶴澤総明先生の墓碑を参拝しました。昨年に引き続き二度目の参拝となるこの日、鶴澤先生のお孫様にあたるの東明氏とともに一人ずつ墓碑を拝み、本校の歩みを報告しました。

金子校長は「世界で活躍することのできる生徒を育てるため、今後もお見守りいただきたい」と祈りを捧げ、次の100年に向けて新たな礎を築く決意を誓いました。



明校ひとくちメモ

30年経つと

この前、文科省の方から30年後の日本の話を聞いた。そこには、さびれた日本しかなかった。若者の職場は主に海外であった。向こう100年に至るまでには幾多の困難が予想される。今はまだまだ余力がある。

ここで踏ん張って名門校として残っていきたい。グローバル化、本校は今のところリードしている。校長の先見の明であり、我々は、必死にその方向に進んだ。常に前進だ！



創立100周年記念事業NEWSは本号が最終号です。

ご支援くださりありがとうございました。